Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2023」（日本語版）

入賞作品

公益財団法人日本科学協会
業務部 国際交流チーム

目　次

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2023」（日本語版）　一等賞作品

上海交通大学　日本語専攻　3 年　馬銀炫..... 3

広州大学　日本語専攻　3 年　劉詩顥..... 4

南京師範大学付属中学江寧分校　高校 2 年　付沢熙 5

北方工業大学　外国語文学　1 年　蘇竟月..... 7

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2023」（日本語版）　二等賞作品

四川外国語大学　日本語専攻　3 年　李湘蓮..... 9

西南交通大学　日本語専攻　1 年　劉婧燁..... 10

江南大学　日本語専攻　3 年　高小博..... 12

陝西師範大学　日本語専攻　3 年　吉妍..... 13

国際関係学院　日本語専攻　2 年　王斉聖..... 14

温州大学　日本語専攻　金晨希 15

三江学院　日本語専攻　3 年　霍平羊..... 17

常熟理工学院　日本語専攻　3 年　李雅萱..... 18

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2023」

（日本語版）

一等賞作品

桜から考えること

上海交通大学
日本語専攻 3 年
馬銀炫

中日両国の交流は深い歴史的な根源を持っています。しかし、周知のように、中国と日本の関係は 19 世紀後半に氷点にまで下がりました。2 つの国の関係はいつも良好だったわけではありません。従って、中日両国の関係はこれからも変わっていくと思われます。そして両国の未来は、私たちの世代の若者が決めることになるのではないでしょうか。

日本語の学習者として、私は常に自分にその責任があるべきだと思っています。このような考えを持って、私は日本の文学作品を読み、日本映画を見て、最終的に『海街 diary』の中にそのヒントを見つけました。

『海街 diary』はとても癒される映画です。ストーリーはわかりやすいですが、深い人生の道理が含まれています。劇中の主人公がこの世を去る度に、監督は桜のシーンを手配します。桜と死を結びつけるのは日本独特の民族文化です。その映画を通じて、私は日本の「物の哀れ」についてより深い認識を持ち、そこから生活への勇気を受け取りました。私は日本人ではないため、文化の根源から「物の哀れ」の概念を認識することはできないかもしれませんが、それに基づいて世界中の人々に伝えられた思想は誰かの心に触れることができると考えています。例えば、日常生活を大切することなど始めて気づきました。

ところで、今年の桜はいつもより早く満開になりました。２０２３年の３月、中日両国民は桜が互いにもたらす喜びを楽しんでいました。そこから、新しい考えが生まれました。私たちは中日両国民の桜への愛を利用し、国民的な交流活動を行うことができませんか。例えば、相手の国で一緒に花見をしたり、桜の育て方を交流したり、桜が持っている象徴的な意味等をテーマに交流したりするのです。

中国の初代外相周恩来はかつて、「共通点を求めて異を残す」という外交方針を打ち出しました。現在、日本と中国は同じ桜を見て共感でき、文化的に共有している部分もある

し、違う文化を見出している部分もあります。共通点を通して分かり合うことはもちろんですが、相違点を否定せず、お互いの考え方の違いを面白がり、理解し合うことがこれからの中日関係につながるのではないでしょうか。

例えば、中国人は日本人に中国国内の有名な桜の名所であり、国際的に有名な大学でもある武漢大学を紹介することで、中国の大学について共有することができます。そして、日本人は日本での桜の象徴的な意味と、なぜ桜が国花になったのかを語ることもできます。さらに踏み込んで、なぜ日本は凋落の美を普遍的に崇拝しているのか、中国は繁栄で強靭な美をもっと好むのかを巡り、お互いの考えをシェアすることもできます。

『海街 diary』の桜のシーンは私に中日関係の未来を考えさせるきっかけとなりました。これからも様々な文化や作品を通して中日両国への理解を深めていきたいです。

映画：『海街 diary』

無縁から有縁へ

広州大学
日本語専攻 3 年
劉詩穎

「雨にも負けず、風にも負けず、欲はなく、決して怒らず、いつも静かに笑っている」。

宮沢賢治の手に書かれたその僅か数語に、私は絶口した。

静まり返った部屋に座り、自分の影を黒い文字の上に重ね、『雨ニモマケズ』の詞藻をしんみりと心に沁み込ませていた。何の欲望も意地もなく、ニコニコ笑ってばかりいるなぞ、ただの変人ではないか。それに、何をされても頭にこないのは臆病ものに相違ないのでは。そう思いながら、眉を顰めていた。

「あらゆることを、自分の勘定に入れずに、よく見聞きし分かり、そして忘れず」。

この数行に記憶の糸が手繰られ、ぼんやりと自分のことを思い出した。

私は自分のことをよく笑う人より、怒りやすい人だと自覚している。周りの人はそうに見えないと言うが、自分には分かる。他人の注目を浴びた時の苛立ち、自分の誤りにより醜態を晒された時のむかつき。いずれにせよ、そう感じるたび自分で自分が嫌いになる。そうやって己の悪癖を脳内に彷徨わせ、片手で顎を支えつつ、手を止めることなく最後のページまで捲った。

「日照りの時は涙を流し、寒さの夏はおろおろ歩き、みんなにデクノボウと呼ばれ」と

いう後半まで進んだ時、記憶の糸が何かと絡み合ったようだった。そして読み終ると、背筋をすっと伸ばし、両手で本を捲り、最初から最後まで何度も読み返した。

その糸先に結ばれたのはアドラー哲学の論点であった。さらに潜ると「全ての悩みは対人関係」という理論に辿り着いた。本来は一括りにし過ぎで最適な見解ではないと考え頭に留めていなかったが、『雨ニモマケズ』のこの詩句に合わせると色合いが一気に変わった。

「欲はなく、決して怒らず」。

所詮私の怒りも自分の欲によって生み出され、他人の視線によってもたらされた悩みに過ぎない。「らしさ」のまま生きていると自負しつつ、本当は世間に散々左右されている。そして他人の目線や論いを言い訳とし、私は思込み、まるで望んでいるかのように自分を競争という欲の檻に閉じ込め、怒りを捏造いした。

目から鱗だった。そこまで読み進めてようやく詩の深みを理解した。闇夜の部屋に詩の世界から飛び出した黒い文字が輝き、私の目に焼き付いた。

たとえ「みんなにデクノボウと呼ばれ」たとしても、「あらゆることを自分の勘定に入れず、よく見聞きし分かり、そして忘れず、欲はなく、決して怒らず、いつも静かに笑っている」でいいのだ。目の前に聳え立つ困難に気付いていたのに知らないふりをし、ただ逃げずに微笑んで立ち向かう。それこそが真の勇気と強さではないか。

私たちの存在には必ず価値があり、焦る必要はない。ただ「日照りの時は涙を流し、寒さの夏はおろおろ歩き」、今、この道を真剣に生きればいいのだ。強靭で忍耐強い心を持ち世間の流れから一歩引いて、匿名な傍観者でいるのも悪くないだろう。そうすれば、俄か雨に打たれて勝てぬとしても、負ける気がしない。

月明かりが窓からこぼれてきて、ふと欠伸をすると宵の月に目が行った。「褒められもせず、苦にもされず、そういうものに、私はなりたい」、私はそう口ずさみ、本を閉じた。

『雨ニモマケズ』 宮沢賢治

家紋を通して見えたもの

南京師範大学付属中学江寧分校
高校２年
付沢熙

中学校の卒業旅行で一度日本の京都に行ったことがある。何より忘れられないのは、古

めかしい町並みのほか、老舗の軒先に掲げられ、風にはためいている暖簾や菓子屋のかわいい看板である。４歳から絵画を学んでいるせいか、暖簾や包装紙の上のさまざまな紋章に心が引かれた。黒と白の混じっている素朴な彩りと簡素なシルエットとの組み合わせには、なんだか不思議な歴史的な物語を含んでいるのではないだろうかと思った。その後、日本文化を知っている母にこれらの紋章は日本の伝統的家紋から生まれるのであると教えられた。

また、妙なる紋章については、わたしにとっておもしろいエピソードもある。日本の旅行がいよいよ終わり、国内友人のためにお土産を準備するとき、お菓子の味が分からなくて戸惑った場合、そのお菓子の包み紙に印刷してある紋章によってだれに送るかを決める。花びらの紋付は女性の友達に、弓矢の紋付けは男性の友達に送った。非常に気に入る紋章を見かけると、お土産の包装紙をめくりとって収集しておき、上包みのないプレゼントさえ送ることがある。

帰国するなり、紋章に関する『家紋を探る』・という本を借りて興味深く読んできた。家紋とは日本人の各家の地位、家柄、家系などの印としてつける紋章である。そして、家紋の起源は、平安時代ごろ公家は社交活動に出席するとき、牛車を利用し、装飾や色が似ている牛車は見分けにくいので、車の目立つ位置にマークをつけたという説がある。つまり、日本の最初の家紋は他人のものと混乱を防ぐ目的があった。歴史の変遷にしたがい、家紋は貴族から武士へ、また庶民の間に伝わり、だんだん日本式のシンボルとなった。さらに、家紋のデザインは円の形をしており、黒と白の二つの色だけ用い、縁起のいい動物や植物の一部を取って簡略化し、「家」という意味を込めている、という特徴がある。日本では、家紋は古くから家族の神聖なる象徴として、優れた家風を伝承したり、家運の栄えを守ったりする機能をしている。この本から、以上のようなことがわかった。

ところで、これほど小さな家紋に、思いがけず魅力的な世界が隠されている。なぜ何百年も続いている老舗の店頭暖簾や商品に素敵な紋章が描いてあるのか、という謎がやっと解けた。大家族がなくなり、核家族が増えつつある現在では、海外留学や出稼ぎでばらばらした家族のメンバーをつなげるのに家紋が役立つのではないだろうかと思う。家からどんなに離れても器具や衣服の上の家紋を見かけると、人々の心を一つにして自慢の家族の歴史を継承しようとするためであろう。ちなみに、中国でも、ただいま優秀な伝統文化を受け継ぎ、家族が団結して家風を輝かすようと若者たちに呼びかけている。そこで、日本の家紋によるヒントを受け、イベンドや儀式において家族のような親近感に富んだバッジや紋章を作って人々に配ったらみんなの心が結びつくかもしれない。実に、日本と中国だけでなく、世界はまるで家のように、各国は家族のメンバーのように、兄弟のような各国の人々は睦まじい家庭、平和な世界を築くために家紋のような親近感につながるものを発見し、利用しなくてはならない。

---

* 森本景一.『家紋を探る』. 平凡社新書. 2008 年

老いと死を恐れない美しい人生

北方工業大学
外国語文学　1 年
蘇竟月

数日前、友人と死生観について話した。しかし、誰もが最終的に死ぬ以上、私たちの今の人生は何の意味があるのだろうかと疑問を抱いた。

それで、私は先日見た日本の映画『人生フルーツ』を頭の中に思い浮かべた。一生連れ添った夫婦の二人、90 歳の津端修一と 87 歳の妻英子の老後の生活を描いた映画だ。修一は建築家で、会社を辞めた後、妻と一緒に自分が建てた平屋に住んでいた。二人は庭にいろいろな果物や野菜を植えて世話をし、実が熟すとさまざまな美食やスイーツを作る。夫婦二人は質素な生活をしているが、そこからは老いぼれのような生活の窮状は見えず、かえって温かみを感じさせた。

「風が吹けば、枯葉が落ちる。枯葉が落ちれば、土が肥える。土が肥えれば、果実が実る。こつこつ、ゆっくり。人生、フルーツ。」二人は映画の中で繰り返されているその言葉のように時をためて、ゆっくり生きている。長い人生の中で、青春の私たちは人生の初めに着いたばかりで、人生の果実はまだ結んでいないので、勝手に人生の意味を否定するべきではない。たとえ私たちはいつか老いて死んでも、恐れずにゆっくりと生き、今の美しい人生を大切にしてこそ、人生は意味がある。

映画の終わりに近づいた頃、誰もが思わぬことが起こった。修一が亡くなった。しかし、画面の中で修一は静かに眠っているように見える。私はこの場面にとても感動し、同時に死への恐怖は一瞬にして消えた。なぜならば、私は村の葬式を見たことがあり、亡くなったお年寄りの家族は戻ってきて泣き叫んで、声だけ出して自分の悲しみと親孝行を他人に表現する。しかし、それは本当の親孝行ではないと思う。そのような泣き声を聞くと恐れしか感じない。逆に、修一の死が静かで、恐れがなく美しかったと思う。英子は自分は少なくとも泣かないようにすると言い、修一のそばにいて彼の顔を撫でながら「待ってて、私が命を尽きて灰になったら、一緒に南太平洋を回ってもらおうね。」と言った。人間は自分を後悔させないような一生を過ごし、静かに去るのは素晴らしいことではないか。英子はそれまでの生活を続け、毎日彼の好きなご飯を作って位牌の前に並べ、二人が育てた果実を家族や友人に分け与え、二人の家を守り続けた。

『人生フルーツ』は私に素晴らしい人生を過ごした夫婦二人の生活を見せてくれた。二人の真剣な生活態度は私に老いと死を恐れなくさせ、ゆっくりと生き、できる限りのことをし、人生に意味がある。一人の本当の死は、彼がすべての人に忘れられた時だ。英子は修一のことを忘れない、私も彼らのしっかりと生きた美しい人生を一生忘れない。この賑やかな社会で生きている我々は生活を癒すためにはしっかりとした生活の美しさが必要

だ。それで、人生はだんだん美しくなる。

映画『人生フルーツ』
出処：life-is-fruity.com

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2023」

（日本語版）

二等賞作品

死に近づいて

四川外国語大学
日本語専攻　3 年
李湘蓮

八月末、久しぶりに故郷に帰った。この日は中元節であり、祖先の霊を見送るために焼香をする習慣がある。

朝早くから小雨が降っていた。家族が祖先に対し焼香をしたが、父はずっと何を祈っていた。恐らく加護を願っていたのだろう。雨粒が襟を濡らし、祖父母の遺影に落ちると、誰かの思いを伝えているかのように見えた。

「自分の心には、何かしら死に対する親しみが起こっていた」

『城の崎にて』を読み終えたばかりだったからか、その一行をふと思い出した。そして疑問。私は祖父母の死を目にした時、不思議と「死」はただの見知らぬ恐怖を感じさせるものだった。

午後は灼熱の下で、家の前で野菜を下処理している時、蝉は必死に鳴いていた。そして足元を見ると、整然と進んでいるアリの行列に気付いた。そして列の先には死んだ蝉が一匹居て、アリたちは蝉の死体を必死に運ぼうとしていた。これは本の主人公が蜂の死を見かけた時の光景と瓜二つだった。アリたちがどれほど頑張って運ぶにせよ、仲間がどれだけ存在を告げるにせよ、まるでそれら全てと関係がないように、本来うるさく鮮明だった生物は、今は本の書いた通り、静寂そのものだ。

夜が更けても私は寝付けず、昼間見た光景を思い出していた。死はこれほど静で自然なものなのか。冴えた月光が床に降り注いでいたが、答えをくれなかった。明け方、ようやく眠れそうになった時、突然激しい腹痛に襲われ、気を失いそうになった。うめき声を出して苦しんでいると、両親が私に気付き、厚い布団で私を包んでくれた。痛い、熱い、寒い、寂しい……頭の中はカオスさながらだった。苦痛に身をくねらせた私は、本の中の鼠

のようであり、産着の赤ん坊のようだった。疲れた、今回死神が足元ではなく枕元に座っているのか、彼を追い払う呪文は何だったか……すると、徐々に、睡魔がやってきたが、ここで寝ると二度と目が覚めないのでは、と思い睡魔と戦った。しかし戦いの末、深い眠りに落ちていった。

長い夢を見た。

真っ暗なトンネルを歩いていると、遠く出口に祖父母が立っているのがうっすらと見えた。トンネルの中に風の音も足音もなく、私は無言のまま、この静寂を楽しんでいた。

蝉の鳴き声が耳に入り、目を開けると、暖かい日差しだった。頬に涙の跡、忙しい両親の姿、そして蝉の声とアリたちも、皆私がまだ生きていることを痛感させたが、昨夜は、死が私のすぐそばにあり、命とは脆いものだとしみじみ感じた。そして、つい「城の崎にて」に出てきたイモリを思い出した。自分もイモリのように死んでしまうと思ったが、偶然にも生き残った。「運のいい奴だ、今日はお前の第二の誕生日だ」死神の囁きが聞こえたようだ。死の一歩手前まで行ったからこそ、生きている私は死に対して親しみを持つようになっただろう。そう考えながら、立川志らくさんが語る落語『死神』の最後の一言を思い出した。「祝ってやるよ、誕生日おめでとう」。

書籍：志賀直哉『城の崎にて』

自信を持って進んでください
―太宰治の『千代女』を読んだ感想

西南交通大学
日本語専攻　1年
劉婧燁

最近、太宰治先生の『千代女』を読み終えた。長い間、心が落ち着かない。それば、この小説の多くが私の心に深く響くからだと思う。では、もう少し詳しく説明しましょう。

太宰治先生は、文学少女の転落を一人称の視点から描いている。叔父の柏木に触発されて原稿を書き、「文才がある」と高い評価を受けて育った和子。しかし、家族のプレッシャー、叔父の期待、夫の賞賛、同級生のささやき、教師のファンファーレの中で、和子はますます劣等感を募らせ、ついには皆の期待に応えられず、文才を失ったとみなされる。

私は昔から自信のない女の子で、親から「もっと自信があれば」といつもどうしよう

もない文句を言われてきた。だから、『千代女』の和子の告白「女は、やっぱり、駄目なものなのね。女のうちでも、私という女ひとりが、だめなのかも知れませんけれども、つくづく私は、自分を駄目だと思います」を読んだとき、理解されているという実感がある。

高校2年生のとき、クラスで学級委員の公募があったのを覚えている。私はもともと地理に興味があったので、どうしても地理代表になりたかった。しかし、担任の先生から「地理代表に立候補したい人は、教壇に上がってください」と言われたとき「私はためらしい」、「私は地理に向いているのだろうか？」、「私は地理が得意なのだろうか？」、「私には地理の才能はない。」そしてついに、「たぶん無理だ 」という結論に達した。結局、壇上で輝く学生たちをぼんやりと見つめ、彼らが堂々と自己紹介するのを眺めながら、参加すらできなかった私は、最初から可能性を失っていた。自分を責めたが、このようなことは今までの人生で数え切れないほどあった。

そして、私に変化をもたらしてくれた人は、その直後に奇跡的に現れた。2年生のときの地理の先生―易先生だった。彼女は私が立候補を希望していることに気づいていたようで、あるいは私を地理が好きを感じ取っていたのかもしれない。彼女は授業中、質問に積極的に答え、テストでいい点を取ると笑顔で親指を立てて励ましてくれた。やがて彼女は、「あなたは素晴らしいのだから、自信を持って進みなさい！」と言ってくれた。この言葉は、高校を卒業して何年も経った今でも、私の脳裏に鮮明に覚えている。この自信こそが、私がこれまでしてきたすべての選択、すべての挑戦、すべての成果、そしてユニークな人間になった理由なのだ。

「 女性に対する時代の制約」という観点からの『千代女』評を多く見かけるが、ごく個人的な観点から勝手な感想を述べたい。和子には、この自信が足りないのだと思う。すでに若干の劣等感を抱いている和子は、外圧という巨大な網の目の下で、ますます自信を失っていく。「親不孝者」「役立たず」というレッテルが和子自身に貼られ、自信を失い、傷つきたいと思うようになり、再びペンを取ったときには、すっかり字が書けなくなっていた。タバコの箱と韓国人の親切を記録した注意深い少女は、長い間黙っていたため、声を出すのが怖くて出せなくなってしまったのだ。

和子が「自信を持って進んで」いれば、「岩見さんには自分を見捨てないでほしい」というような無念な結末にはならなかったと思う！というわけで、自信のないすべての人に言いたい「自信を持って進みなさい、あなたは唯一無二のスターなのだから。」

注：青空文庫太宰治の『千代女』

以言伝心―
『舟を編む』を読んで

江南大学
日本語専攻　3 年
高小博

夏休みに私は『舟を編む』という本を読んだ。タイトルと異なり、内容は辞書の編纂についての物語だ。辞書は言葉の海を渡る小舟で、辞書を編纂することは小舟を編纂すること、それで『舟を編む』と題されている。

主人公の馬締は言葉に特別敏感な人物で、言葉にこだわり過ぎて口下手となり、営業部の人達に「変なやつ」と見なされている。しかしそのおかげで、彼は新人不足に悩んでいた辞書編集部の荒木にスカウトされた。その時から馬締は十五年間、辞書の編纂に没頭し続けていく。

私にとって最も印象的なシーンは、馬締がラブレターを書いた時のことである。彼は香具矢という女性に一目惚れし、ラブレターで想いを伝えることにした。しかし、「いまの私の心情を率直にお伝えするなら、『香具矢香具矢、若を奈何せん』といったところです」という漢文のような数十ページの分厚いラブレターができてしまう。どうにかして自分の心を伝えたいと願うあまり、空回ってわけのわからないことになってしまったのである。受け取った香具矢はその難解な手紙が理解できず、ラブレターとも思わなかった。

辞書を作るような言葉のプロが、ラブレターで失敗する。それは恋心を伝えたいと考えた時、「自分の想いを伝えたい」という気持ちが強すぎ、「相手に伝えたい」という気持ちが疎かになったからではないだろうか。幸いなことに後日、馬締は香具矢が理解しやすい言葉を選んで、「好きだ」と言った。わずか 3 文字の方が、自分の気持ちがきちんと相手に通じたのである。

実は私も、「自分の想いを伝えたい」それだけ考えている事が多い。これまで日本語を勉強し、多くの言葉を覚えてきたのに、思っていることをきちんと伝えられないという事もよくある。華やかな言葉で素晴らしい文章を書こうとしたり、文人気取りに話そうとしたり、思っていることを完璧に伝えようとすると、いろいろ考えて、かえってきちんと伝えられなくなる。それは、「自分の想いを伝えたい」そのことに閉じ込められてしまい、「相手に伝えたい」という気持ちを無視してしまってるからだろう。

始めに述べた本の話を応用するなら、言葉は自分と相手、二人の心の海を渡る小舟と言えるかもしれない。自分の想いを相手に伝えるために、舟を編む。しかし、私たちはついつい、自分の身の丈を超えた船を造ってしまう。大きすぎる船を造ってうまく動かなかったり、キラキラした船を造って海賊に襲われたり、相手の心までたどりつけないことがよくある。大切なのはやはり、自分の想いと同じサイズの、そして何より「相手の心までき

ちんと届く」言葉の舟を編むことだろう。

この作文という舟に乗って、私の考えや想いが、読者の方々の心にきちんと届くことを願っている。

『舟を編む』

彼女たちの翼を折らないように

陝西師範大学
日本語専攻　3年
吉妍

冒頭で質問だが、同一の条件で両面均一のコインを投げると、表裏それぞれの確率はどのくらいか。約5割だ。そして、日本人口を男女別にみると、割合はどのくらいか。それも約5割だ。しかし、実際の社会現実は単純な数値以上に複雑だ。

東京大学の入学式の祝辞で中国で広く知られた上野千鶴子氏は、社会の性差別を問題視していて猛烈な批判を常に投げ上げている。彼女がその祝辞で言及した東大の入学率の男女差の「2割の壁」も強い反響を呼んだ。それよりも厳しいのは、厚労省の調査によると、2023年日本企業の女性管理職が1割程度だということだ。この差はいったいどこからなのか。その問題には、上野氏の『家父長制と資本制』に書かれた近代資本制社会に特有の女性の受けた二重の抑圧が答えになるかもしれない。

この本では、市場と家庭の二つの視点から女性への抑圧を分析している。一方で、家庭は女性労働を求めている。家内で女性の家事や子育てなどの労働について、マルクス主義フェミニズムは「家事労働」、「再生産労働」や「不払い労働」といった概念を初めて提唱し、いつも隠れていた女性労働の貢献を明らかにした。しかし同時に、市場も女性労働を求めている。近代資本制の発達につれて、市場が発展し、それに参入した人が増加し続ける。だが、家内労働に縛られた女性が進路が限られ、仕事と家庭の両立に直面しなければならない。

この本は1990年で発表されたので、現代に完全に相応しいことはできなくても、よい参考になれるし、性別にかかわる社会問題の手がかりも見つけた。現代でよく見られるのは、同じ仕事で給与が異なること、女性の二重労働、女性向けの仕事が二次的労働市場に限られることなどだ。そして、卒業したばかりの先輩方と雑談した時こそ、彼女たちの口ずから本当の現実を一瞥することができ、女子学生を待っている就職環境の厳しさを身を

もって感じた。この本を読むことで、以上の状況は自然なのではなく、性別役割分業から徐々に発展してきたのだということがよく分かった。

これからは日本だけでなく、高齢化社会に入ったばかりの中国も労働力不足に悩まれるだろう。その点で、女性の労働力は社会発展にとっても不可欠だ。彼女たちの翼を折らないように、中日両国は女性の権利擁護、ジェンダー平等の促進のために全社会の協力を呼びかける必要がある。女性のニーズを考慮し、彼女たちの力を無視せず、排除せず、バランスをより良く取る社会を作れると思う。喜ばしいことに、今の私たちが目に見えるのは女性エンパワーメントはますます重要視されるようになっている光景だ。

男女格差が空前の関心を寄せた今に生きている私たちにとっては、現状を分析し、他人と支えあい、現状を変えるための知恵が何よりも大切だと私が思っている。未熟ながらも、力の及ぶ限りジェンダー平等の社会に貢献していきたい。

（日本の本：上野千鶴子『家父長制と資本制』）

「善を守る『糸』」

国際関係学院
日本語専攻　2 年
王斉聖

休暇中、黒澤明監督の映画『羅生門』を観た後、芥川龍之介の『羅生門』に興味を持ち、『羅生門』を読むために手に入れた短編小説集でしたが、その中の『蜘蛛の糸』に深く引き込まれました。

『蜘蛛の糸』は、泥棒カンダタが悪事を働きすぎて死後、18 層の地獄に落とされ、さまざまな拷問を受けていましたが、仏陀は彼がかつて蜘蛛を助けたことを思い出し、彼にまだ善心があると考え、彼に地獄から逃れるための蜘蛛の糸を垂らしました。カンダタはその糸につかまり、上り始めますが、彼は他の罪人たちも糸に掴まっていることに気付くと、糸が切れることを心配し、他の者たちを蹴落とそうとし、結局は彼も一緒に再び地獄に落ちました。

『蜘蛛の糸』は童話のようですが、実際には人間性について深く掘り下げ、善悪観や人間の複雑さを鮮やかに描写しています。芥川龍之介は、物語で人間性の善の側面に対する彼の内なる追求と願望を世に示し、彼の思考は中国の「勿以恶小而为之，勿以善小而不为」という古いことわざのように、小さな善行を無視しないよう促しています。

しかし、芥川の作品から百年が経過した今でも、私たちは人々の心に真の善意を見出すことができていない現実に直面しています。インターネットの発展により、人々の距離は縮まりましたが、無形の壁が生まれ、社会はますます冷たくなり、高齢者が転んでも誰も手を差し伸べず、自殺者が現れても多くの人が見ているだけで止めない、さらにはネット上で他人を攻撃し、ののしり合う人々が増え、キーボードから簡単に出てくる言葉が他人にどれほどの傷害を与えるかも考えることはありません。

人間は社会的な生き物であり、孤独に生きることはできません。他人に対する善意は最終的に自分に戻ってくるということを私たちは理解すべきです。

ネット上で他人をののしる人々は、蜘蛛の糸で他の罪人を叱責したカンダタと同様です。彼らがののしられる立場に追い込まれ、深みに落ち、誰も慰めてくれない状況に直面したとき、自分の行動をどのように振り返るのでしょうか。

この作品は、自己中心的な心を厳しく批判し、人々の友好と調和を願うものであり、今日でも有効です。中国の人々が魯迅の作品を評価するように、現実を分析する文学作品は時代を超えています。

私たちは著者の洞察力と筆致を称賛すべきでしょうか、それとも百年経った今も社会が私たちの期待するように美しいものに変わらないことを嘆くべきでしょうか。

現実に立ち向かうとき、私たちは嘆く必要はありません。自ら始めて、生活に情熱を持ち、他人に親切で冷たくならないよう心がければいいのです。魯迅が、「有一分熱，發一分光，就令螢火一般，也可以在黑暗里發一點光，不必等候炬火。此后如竟没有炬火，我便是唯一的光」と言ったように、自分の善意と熱意を保ち、現代の光となるよう努力していきたいです。

『蜘蛛の糸』――芥川龍之介

縁の結びを掴む

温州大学
日本語専攻
金晨希

最近、私は一穂ミチの短編小説「回転晩餐会」を読んだ。この作品は心に深く響く作品だと思う。

ある回転レストランの 40 年以上の常連客で、穏やかで礼儀正しい夫婦は年に一度だけ

訪れる。妻の足が少し悪く、彼女を促すことなく、いつも夫が彼女を優しく手助けし、店員たちをいつも癒してくれる。

傍目には幸せそうな夫婦は、実際には夫婦ではなく、60 年前の飛行機墜落事故で残りわずかの生存者で、ただの「赤の他人」だ。あの時、このレストランで炎上した飛行機を目撃したので、毎年事故の日にここで食事することになった。

窮屈な現実の中でお互い支え合いながら生きていた二人の関係は、恋愛感情かどうかはっきりしないけれど、深く切れない絆が結ばれているはずだ。この短編小説を読んで、私は人々との繋がりの大切さを感じ、そして日本の「縁」の文化に感動した。

日本において「繋がり」または「縁」という文化は古くから受け継がれている。日本には数えきれないほどの神社が存在し、神社での定期的な参拝は日本人の日常生活の一部だ。この参拝の目的は神様との繋がり、または神様を通じて他の人との縁を求めることだと言える。

思えば、日本の文学や映像作品などのほとんどは、縁の力を感じさせられる。日本の古典文学の最高傑作である『源氏物語』から、「千と千尋の神隠し」や「君の名前」などの人気映画まで、どれも「縁」をテーマにしている。

他人との繋がりは非常に重要だ。日本の漫画の巨匠、手塚治虫は、「人生は一人じゃない、二人三脚で走らねばならんこともある」と述べている。人間は社会的な生き物であるため、外界との繋がりを持たないことは非常に難しく、辛いことだ。

私はかつて日系企業で約一カ月の実習経験がある。当時、日常の日本語会話すらできず、毎日不安と緊張の中で席に座っていた。何もできないだろうと思っていたけれど、所属部署の日本人の先輩方が親切に手助けし、忙しい中で私にさまざまな課題を与えてくれた。彼らのおかげで、その一カ月の間に多くのことを学んだ。伝票整理などのスキルはもちろん、退社後の飲み会や実習終了時の社員全体への挨拶など、貴重な経験から日系企業の「家族のような縁」の文化を深く味わった。今でも、所属部署の先輩方と連絡を取り合っている。要するに、中国の個人主義的な文化と比較すると、日本は確かに縁を重視していると感じる。

縁は不思議なものだ。どれほど短い時間であっても、結ばれた縁は消えない。だからこそ、目の前の縁にしっかりとつかまってください。

「回転晩餐会」（一穂ミチ）

思い出は本物か偽物か

三江学院
日本語専攻　3 年
霍平羊

「石黒の小説は、その巨大な感情の力で、私たちが世界とつながっている幻覚の下に隠された深淵を発掘した。」これは、ノーベル文学賞受賞時の挨拶だ。読者には、漠然とした印象、淡い感じが残り、本全体も完結したストーリーではなく、無数の空白を残すことで読者自身の想像を掻き立て、その深い意味を体得させようとしている。

英国に移住した未亡人によって、故郷の長崎や故人への思いを中心に物語全体が展開されている。舞台は戦後の長崎。著者は戦争の恐ろしさを意図的に薄め、戦争に苦しめられた母娘が望んだ安定と新たな生活、戦乱がもたらした影と心の闇から抜け出せない様子を重点的に描いている。

思い出は、この作品の最も重要なテーマだ。主人公悦子の思い出は、矛盾と空白に満ちており、私は批判的な目で 2 回読むことで、歪んだ物語を自分なりに読み解いていった。例えば、物語の始まりの部分である娘景子の自殺である。なぜ自殺したのかは説明されておらず、自分の話を友人の話に置き換えることで、彼女自身の罪悪感を減らすよう導いている。

石黒一雄は「思い出が好きなのは、思い出は私たちが自分の生活を見つめるフィルターだからです。思い出が曖昧で、自分を騙す機会を与えてくれました。作家として、実際に何が起こっているかではなく、何が起こっているのかを教えてくれることに関心があります。」と語っている。彼が関心を持っているのは、外の現実の世界ではなく、人間の複雑な心の世界なのだ。歪んだ思い出を通じて反応する微妙な感情の変化は、人々がこの世界をよりよく覗くのに役立つのだ。

物語の最後では、悦子と友人佐知子は同一人物で、娘景子は友人の娘万里子であることを示唆している。はじめからそうだと疑っていたが、確かな足跡は残していなかった。だが、物語の最後になると、

「あの日、景子は喜んでいた。私たちはケーブルカーに乗った」

ともらし、悦子自身が丹念に設計した嘘を一言で突き破っている。

思い出は、過去のつらい経験を変え、それによって自分を満足させる生活を構築することができる。本の中で描かれているように、戦争の傷は悦子に過去の人生を架空のものにし、思い出の中では優しく良い母親を創り出していたのだ。

石黒一雄はこのような描写により、自分を欺くこと、後ろめたいことを表現し、人の心の複雑さと人の生活に対する思いを伝えようとしていた。従って、石黒一雄の淡々とした穏やかに見える文面にも、実は深い意味が込められているということがこの作品から分か

った。

『遠い山なみの光』

人間として真剣に生きていく

常熟理工学院
日本語専攻　3 年
李雅萱

高校二年の時、初めて『嫌われ松子の一生』という映画を見た。ヒロインである松子の悲惨な一生に、私は感慨に沈んだ。その時の胸の動悸は今でも覚えている。音楽の教師だった松子は、お金を盗んだ容疑のあった生徒の龍を保護するため、学校を辞職させられた。それは松子の不順な一生の始まりとなった。彼女は何人とも恋愛したが、全部不毛な恋となった。いい思いどころか、稼いだお金を貢いでいた恋人でもあるヒモ男を殺してしまい、懲役 8 年の刑に処された。最後、53 歳松子の死体は川のほとりで発見された。中学生に野球のバットで殺されたのだ。

夏休みに偶然にインターネットで見つけて、懐かしくなり二度目を見た。私はどんな人生を生きたいのか、どうすれば生きられるのだろうか？映画について、いろいろ考えさせられた。

松子には重い病気の姉がいて、小さい時から自分の考えや希望はいつも父に無視され、結婚することまで父に姉の気持ちを考えて言うべからずと怒鳴れた。その経験から、恋人に暴力を振るわれても、だまされても、次々恋に落ちた。「殴られても、殺されても、独りぼっちよりはましだ」、「一人じゃなくなればどうでもいい」と松子が思ったように、誰か男と恋するのは、一人になりなくないからなのだ。

実は松子は家族の皆に愛されている。友達のめぐみにも愛されているのだ。松子が何回も「私の人生はこれで終わった」と思っても、立ち直って生き続けていくことができるのはそのためだと思う。彼女が死ぬ前のシーンでは、めぐみの名刺を見つけたあと、胸を張って光に向けて大股で歩く姿が本当に眩しいのだ。私はこういう輝かしく、人生を真剣に生きる姿の松子が好きになった。恋するたびに、彼女は全身全霊で相手を愛している。恋人の作家と恋したときは、いくら殴られても、生活に困り水商売をさせられても、連絡を絶った兄に借金しても、離れようとは思わなかった。美容師と出会ってから、松子は幸福のあまりに歌いながら家事をしていた。刑務所にいても、美容師の妻になるという夢を持

ち、美容師の資格を取った。彼女の心には光がある。自分がまだできると自信をもったからこそ、深夜まで野球をやっている中学生たちに「早く家に帰りなさい」と注意できた。

松子の一生は嫌われる一生というより、むしろ愛を追求しつつけて、勇敢な一生だと言える。実生活において、私たち人間は誰もが松子のように、生活に打ちのめされ、絶望しては、希望に燃えて、また絶望してまた希望に燃えて、生きていくのだ。

人生はいつも順調ではない。起伏があってこそ人生といえるのだ。「生活は私を苦しめても、私は初恋ごとく生活を愛している」といつも冗談のように言っているが、周りが暗くても、私たちは光を探し、追い、生きていったらどうだろう。松子が死ぬまで希望を失わないでいる。我々は、一時の迷いや気落ちでもかまないが、すぐ立ち直って、今のことを大切にしながら、未来への希望を抱いて、光を向いて大股で歩いて行こう。

『嫌われ松子の一生』［日］山田宗樹著、中島哲也　監督